

バナッハ空間における最適制御問題

— バンバン制御に関する一つの考察 —

(東大・理) 増田久弥

§1. 序

lumped parameter system において、バンバン制御は、一つの興味ある性質である。最近 distributed parameter system の研究が盛んになりつつあるが、ここでは、集中系において成立していることが、分布定数系においても成立するかというところが問題意識の一つに存していると思われる。しかるば、バンバン制御は、分布定数系に対して成立するか。これは、次の例を示すごとく一般には否定される。

$$(1) \begin{cases} \partial u / \partial t = \Delta u + \alpha(t) f(u) & t \geq 0, x \in G \\ u(x, 0) = u_0(x), u(x, t) = 0 & \text{on } \partial G \end{cases}$$

ここで、 $\Delta = \partial^2 / \partial x_1^2 + \dots + \partial^2 / \partial x_m^2$ 、 G は R^m の中の有界な境界をもつ有界領域 ($m \geq 2$)、 $\alpha(t)$ は $|\alpha(t)| \leq 1$ なる t の可測函数、 $\{g_j\}$ を $-\Delta$ にディルクレイ条件を有する作用素の $L^2(G)$ における正規直交完備系とすると $f(u) \equiv \sum_{j=1}^{\infty} 1/j^m \times g_j(u)$ と定めた。

任意に $T > 0$ を与えよう。このとき T における系(1)に於



によって支配される状態 $u(x, T)$ は, $\alpha(t)$ を $0 \leq t \leq T$ において, 一意に定めてしまう。これを以下で示そう。もしこれが示されるれば, (1) に対してバ=バ=制御 (時間最適問題における) は起りえぬことは容易にわかる。さて

(1) の解は,

$$u(x, t) = \sum_{j=1}^{\infty} e^{-\lambda_j t} (u_0, \varphi_j) \varphi_j + \sum_{j=1}^{\infty} \int_0^t e^{-\lambda_j(t-s)} \alpha(s) (\varphi, \varphi_j) \varphi_j ds$$

で与えられる。ここで λ_j は, φ_j に対応する固有値,

(\cdot, \cdot) は $L^2(G)$ のスカラー積を示す, 任意の $T > 0$ を固定したとき $u(x, T)$ が $\alpha(t)$ を $[0, T]$ で一意に定めることを示すには,

$$\sum_{j=1}^{\infty} \int_0^T \exp[-\lambda_j(T-s)] \alpha(s) (\varphi, \varphi_j) \varphi_j ds = 0$$

から $\alpha(s) = 0$ on $[0, T]$ が成れば $\|\cdot\|_0$ である。これは, $\{\varphi_j\}$ の直交性と $(\varphi, \varphi_j) \neq 0$ を考えればわかる。

$$\int_0^T \exp[-\lambda_j(T-s)] \alpha(s) ds = 0, \quad j=1, 2, \dots, \infty$$

$$(2) \quad \int_0^T \exp(\lambda_j s) \alpha(s) ds = 0 \quad \text{と同等である。}$$

$-\lambda_j$ は, Δ のディリクレ条件をもつ作用素の固有値
 より次の漸近分布をもつ。([1], [2] をみよ)

$$\sum_{\lambda_j \leq \lambda} 1 \sim K \lambda^{\frac{n}{2}} \quad (K = \text{正の定数})$$

$\lambda = \lambda_m$ とおけば

$$\lambda_m \sim K' m^{\frac{2}{n}} \quad (K' = \text{正の定数})$$

をえる。 仮定 $n \geq 2$ より

$$\sum_{j=1}^{\infty} \frac{\operatorname{Re}(\lambda_j)}{1 + |\lambda_j|^2} \sim \frac{1}{K'} \sum_{j=1}^{\infty} \frac{1}{j^{\frac{n}{2}}} = \infty.$$

故に, Szász の定理 ([3] をみよ) より $\{ \exp(\lambda_j s) \}$
 は, $L^2([0, T])$ で closed である。 かくして (2) より
 $\alpha(s) = 0$ on $[0, T]$ をえる。

次に,

$$(3) \begin{cases} \partial^2 u / \partial t^2 = \Delta u + \alpha(t) f(u) \\ u(x, 0) = u_0(x), \quad u_t(x, 0) = u_1(x), \\ u(x, t) = 0 \quad \text{on } \partial G \end{cases}$$

を考へる。 この場合, $n > 2$ のとき $\forall T$ を固定
 したとき, この時刻 t に対する系 (3) には $\alpha(t)$ で支配される
 状態 $u(x, T)$ は, $\alpha(t)$ を $[0, T]$ で一意に定めよう。
 $n = 2$ のとき, $0 < T < 2\pi$ ならば, 同様の

事が成立する。上の例が容易にわかる通り、 $\mathcal{H} = \mathcal{H} = \mathcal{H}$ Principleは成立するわけでは一般にない。しかし任意の $T > 0$ と任意の $x(t)$ を与えたとき、(1) 又は (2) の解で、 $y_j(t) (y_j(t) \equiv 1 \text{ on } [0, T])$ と同時にどれかそれに対応する時刻 T における (1) 又は (2) で支配される系の状態 $u(x, T; y_j)$ にまで近似的に到達させることができる。これを示するのが、この報告の目的である。

記号

X_0 ; 反射的且分離的バチノバ空間

X_1 ; バチノバ空間,

\mathcal{U} ; X_0 の中の有界凸曲線集合,

$\hat{\mathcal{U}}$; \mathcal{U} の端点の全体,

$\mathcal{V}(V) \equiv \left\{ u(s); [0, T] \text{ 上に定義された可測函数で } \right.$
 $\left. u(s) \in V \text{ かつ } s \in [0, T] \right\}$

$k(t, s); 0 \leq s \leq t \leq T$ 上に定義された s, t の連続関数

連続関数 X_0 から X_1 へ有界作用素,

$\Omega(t) \equiv \left\{ \int_0^t k(t, s) u(s) ds, u(s) \in \mathcal{V}(\hat{\mathcal{U}}) \right\}$

$\Omega^0(t) \equiv \left\{ \int_0^t k(t, s) u(s) ds, u(s) \in \mathcal{V}(\hat{\mathcal{U}}) \right\}$

定理

- (i) $\Omega(t)$ は X_0 中で有界, 凸, 閉集合. $= \bar{\Omega}(t)$
 (ii) $\Omega(t)$ の強閉包 $= \Omega(t)$

例之は, 系(i)に於いては $X_0 \equiv L^2([0, T])$, $X_1 \equiv L^2(G)$

$U \equiv \{\alpha(t); \alpha(t) \text{ は可測且 } |\alpha(t)| \leq 1 \text{ なる関数}\}$

$\hat{U} \equiv \{\alpha(t); \alpha(t) \in U \text{ 且 } |\alpha(t)| = 1 \text{ なる関数}\}$

$K(t, s)\alpha = \sum_{j=1}^{\infty} e^{-\lambda_j(t-s)} (\alpha, \varphi_j) \varphi_j$ なる α がある。

又 attainable set $\Omega(t)$ の中に制御函数 α とし

て, $|\alpha(t)| = 1$ なるものにかき

たとき, $\Omega(t)^\circ$ は $L^2(G)$ の位相で $\Omega(t)$ の中に, 稠

密にある。又上の例の場合, $\Omega(t)$ の端点全体と $\Omega(t)^\circ$

は一致するから, $\Omega(t)$ の中, その端点が dense である。

§ 2. 幾つかの補題

X_0 は, 分離的なり, 故に如き, $\{A_j\}_{j=1}^{\infty} \subset \hat{U}$ が存在する。

$\{A_j\}$ の閉包 $\supset \hat{U}$. $U_N \equiv \{A_j; j=1, 2, \dots, N\}$ の

凸包 $\hat{U}_N \equiv \text{co}\{A_j; j=1, 2, \dots, N\}$

U_N は, X_0 の中 (即ち \hat{U} の中) に包摂する有界凸な

閉集合である。故に \hat{U}_N は X_0 の中で有界凸な閉集合である。

補題 1

(4) $U = \bigcup_{j=1}^{\infty} U_j$ の凸包 ($\equiv \overline{\bigcup_{j=1}^{\infty} U_j}$)

証明. 分離的で反射的バナッハ空間 X_0 の中で U は, 有界な凸な閉集合であるから, 弱コンパクトである。クライン-ミルマンの定理により U は, $co \hat{U}$ の弱閉と一致する。 X_0 は, 反射的より, $co \hat{U}$ が凸である $\Rightarrow \varepsilon$ 考 $\varepsilon = \lambda_k$ のとき $U = co \hat{U}$ の強閉包

それ故に,

(5) $U \subseteq \overline{co \{a_j; j=1, 2, \dots\}}$

他方

(6) $U \supseteq \overline{\bigcup_{j=1}^{\infty} U_j} = \overline{\bigcup_{j=1}^{\infty} co \{a_n; n=1, 2, \dots, j\}}$

である。それ故に, 任意の $\varepsilon > 0$ と任意の $co \{a_j; j=1, \dots\}$

の元 a に対し, 次の如き $b \in co \{a_j; j=1, 2, \dots\}$

が存在する, $\|a - b\| < \varepsilon/2$, $b = \sum_{j=1}^N \lambda_j b_j$

($b_j \in \{a_j; j=1, 2, \dots\}$, $\sum \lambda_j = 1$, $\lambda_j \geq 0$).

ここで $\|\cdot\|$ は X_0 のノルムを示す。各 b_j に対し, 次の如き,

$c_j \in \{a_n; n=1, 2, \dots\}$ が存在する: $\|b_j - c_j\| < \varepsilon/2$.

$c = \sum_{j=1}^N c_j \lambda_j$ とおくと $c \in \bigcup_{j=1}^{\infty} co \{a_n; n=1, \dots, j\}$

より $\|a - c\| < \varepsilon$ である。これは,

$a \in \overline{\bigcup_{j=1}^{\infty} co \{a_n; n=1, \dots, j\}}$ を示している。

$$(5), (6) \text{ より, } \mathcal{U} = \overline{\bigcup_{j=1}^m \alpha_j \{A_j\}} \quad j=1, 2, \dots, m$$

(証了)

補題2. V を X_0 中の凸な閉集合とする。任意の $\nu(s) \in \mathcal{F}(V)$ に対し、次の如き、階段函数 $\nu_m(s) \in \mathcal{F}(V)$ が存在する； $\nu_m(s) \rightarrow \nu(s)$ a.e. s in $[0, T]$.

証明. $\nu(s)$ に対し、階段函数 $\nu_m(s) \in \mathcal{F}(X_0)$ で

$\nu_m(s) \rightarrow \nu(s)$ a.e. s in $[0, T]$ が存在することは定

義より明らか。 $\nu_m(s) = \sum_{j=1}^{N_m} \chi_{B_j^m}(s) \cdot b_j^m$ とおこう。

ここで $\chi_{B_j^m}(s)$ は、Borel集合 B_j^m の特性函数であり、

b_j^m は X_0 の元である。各 b_j^m に対して、 V が凸である

ことから、次の如き $c_j^m \in V$ が存在する。

$$\inf_{b \in V} \|b_j^m - b\| = \|b_j^m - c_j^m\|.$$

よって、

$$\nu_m(s) = \sum_{j=1}^{N_m} \chi_{B_j^m}(s) c_j^m$$

とおくと、

$$\begin{aligned} \|\nu_m(s) - \nu(s)\| &\leq \|\nu_m(s) - \nu_m^*(s)\| + \|\nu_m^*(s) - \nu(s)\| \\ &\leq 2 \|\nu_m^*(s) - \nu(s)\| \end{aligned}$$

であるから、 $m \rightarrow \infty$ とせ、右辺 $\rightarrow 0$ a.e. s in

$[0, T]$ を考えれば、 $\nu_m(s) \rightarrow \nu(s)$ a.e.

s in $[0, T]$ 且 $\nu_m(s) \in V$ である。証了。

— 17 —

補題3 $\Omega(t) = \left[\bigcup_{j=1}^{\infty} \left\{ \int_0^t K(t,s) u(s) ds; u(s) \in U_j \right\} \right]$
 の強内包

証明

$\Omega(t)$ から任意に $w(t) = \int_0^t K(t,s) u(s) ds$ をとる。

$u(s) \in \text{子}(U)$ 。補題2によって、次の如き階段函数

$u_m(s) \in \text{子}(U)$ が存在する。 $u_m(s) \rightarrow u(s)$ a.e. in s

in $[0, t]$ と $\text{ess. sup}_{s \in [0, t]} \{ \|u_m(s)\|, \|u(s)\| \} < \infty$ (

$u_m(s), u(s) \in U$ かつ) であるから、

$$\lim_{m \rightarrow \infty} \int_0^t \|u_m(s) - u(s)\|^2 ds = 0$$

をえる。故に、 $K(t,s)$ の s についての連続性より、

$$\lim_{m \rightarrow \infty} \int_0^t K(t,s) u_m(s) ds = \int_0^t K(t,s) u(s) ds$$

をえる。かくして、 $\bar{u}(s) \in \text{子}(U)$ なる任意の階段函数に対して、

$$\int_0^t K(t,s) \bar{u}(s) ds \in \overline{\bigcup_{n=1}^{\infty} \left\{ \int_0^t K(t,s) v(s) ds; v \in \text{子}(U_n) \right\}}$$

を示せば、 $\int_0^t K(t,s) u(s) ds$ は求める性質をもつ。

$\bar{u}(s)$ は階段函数まつ、 $\bar{u}(s) = \sum_{j=1}^N \chi_{B_j}(s) b_j$ と表わされる。 $b_j \in U$ 。各 b_j に対して、 $\exists c_j^m \in U_m$;

$\inf_{c \in U_m} \|b_f - c\| = \|b_f - c_f^*\|$ が成立する。

$U = \overline{\bigcup_{n=1}^{\infty} U_n}$ (補題 1 より) 且 $U_n \subset U_m$ ($n < m$)

であるから, $\|b_f - c_f^*\| \rightarrow 0$ ($m \rightarrow \infty$)

である。 $u_m(\rho) = \sum_{j=1}^N \chi_{B_j^c}(\rho) c_j^*$ とおくと,

$u_m \in \mathcal{F}(U_m)$ (任意の $\rho \in [0, t]$) 且 $u_m(\rho) \rightarrow \bar{u}(\rho)$

$\rho \in [0, t]$ 。 故に,

$$\lim_{m \rightarrow \infty} \int_0^t \|u_m(\rho) - \bar{u}(\rho)\|^2 d\rho = 0$$

よって

$$\int_0^t K(t, \rho) u_m(\rho) d\rho \rightarrow \int_0^t K(t, \rho) \bar{u}(\rho) d\rho$$

$$\int_0^t K(t, \rho) u_m(\rho) d\rho \in \left\{ \int_0^t K(t, \rho) v(\rho) d\rho; v \in \mathcal{F}(U_m) \right\}$$

よって

$$\int_0^t K(t, \rho) u_m(\rho) d\rho \in \overline{\left\{ \int_0^t K(t, \rho) v(\rho) d\rho; v \in \mathcal{F}(U_m) \right\}}$$

$$\text{故に } \int_0^t K(t, \rho) \bar{u}(\rho) d\rho \in \overline{\left\{ \int_0^t K(t, \rho) v(\rho) d\rho; v \in \mathcal{F}(U_m) \right\}}$$

証了。

補題 4

$$\left\{ \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho; u \in \mathcal{F}(U_m) \right\} = \overline{\left\{ \int_0^t K(t, \rho) v(\rho) d\rho; v \in \mathcal{F}(U_m) \right\}}$$

証明 T_m の端点は, $\{a_j\}_{j=1,2,\dots,m}$ である。

$K(t, \rho) a_j$ は $\rho \in T_m$ 上, 連続な階段函数 $K_p(t, \rho) a_j$

($\rho \in T_m$ の) で近似される:

$$K_p(t, \rho) a_j \xrightarrow{p \rightarrow \infty} K(t, \rho) a_j \quad (\rho \text{ 及 } j = 1, \dots, m \text{ 同様}).$$

$C(T_m)$ の任意の元 $u(s)$ は, $u(s) = \sum_{j=1}^m \alpha_j(s) a_j$ ($\sum \alpha_j(s) = 1, \alpha_j(s) \geq 0$) と表わされる。これは, "証明すべき事" であるが, ここでは略す。故に,

$\int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho = \sum_{j=1}^m \int_0^t K(t, \rho) \alpha_j(\rho) a_j d\rho$

$$\text{又, } \left\| \int_0^t K_p(t, \rho) u(\rho) d\rho - \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho \right\|$$

$$\leq \sum_{j=1}^m \int_0^t \|K_p(t, \rho) a_j - K(t, \rho) a_j\| d\rho$$

故に,

$$\int_0^t K_p(t, \rho) u(\rho) d\rho \rightarrow \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho \quad (p \rightarrow \infty)$$

すなわち, $u(s) \in C(T_m)$ に対して一様である。

したがって, 任意の $\varepsilon > 0$ に対して, 次の如き P_0 が存在する:

$$\left\| \int_0^t K_p(t, \rho) w(\rho) d\rho - \int_0^t K(t, \rho) w(\rho) d\rho \right\| < \varepsilon/3$$

すなわち $p \geq P_0$ なら $w \in C(T_m)$ 。

他方,

$$(T) \left\{ \int_0^t K_p(t, \rho) w(\rho) d\rho; w \in C(T_m) \right\} = \left\{ \int_0^t K_p(t, \rho) w(\rho) d\rho; w \in C(T_m) \right\}$$

が成立する。これは後で示そう。さて、任意に $u \in \mathcal{F}(U_m)$ をとると、

$$\left\| \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho - \int_0^t K_p(t, \rho) u(\rho) d\rho \right\| < \varepsilon/3, \quad p > p_0.$$

(17) によれば、

$$\left\| \int_0^t K_p(t, \rho) u(\rho) d\rho - \int_0^t K_p(t, \rho) w(\rho) d\rho \right\| < \varepsilon/3$$

なる如き $w \in \mathcal{F}(\hat{U}_m)$ が存在する。この w に対し、

$$\left\| \int_0^t K_p(t, \rho) w(\rho) d\rho - \int_0^t K(t, \rho) w(\rho) d\rho \right\| < \varepsilon/3, \quad p > p_0$$

が成立する。故に、 $\exists w \in \mathcal{F}(\hat{U}_m)$;

$$\left\| \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho - \int_0^t K(t, \rho) w(\rho) d\rho \right\| < \varepsilon.$$

これは補題4の成立を示している。

さて、(17) 式を示そう。

$$K_p(s, a_j) = \sum_{i=1}^{N_j^i} \chi_{B_{a_i}^j}(p) b_{a_i}^j \quad \text{と表わされる。}$$

(17) 式は、

$$\begin{aligned} & \left\{ \sum_{j=1}^m \sum_{k=1}^{N_j^i} \int_0^t \alpha_j(\rho) \chi_{B_{a_k}^j}(p) d\rho b_{a_k}^j ; \sum \alpha_j(\rho) = 1, \alpha_j(\rho) \geq 0 \right\} \\ (E) \quad & = \left\{ \sum_{j=1}^m \sum_{k=1}^{N_j^i} \int_0^t \alpha_j(\omega) \chi_{B_{a_k}^j}(p) d\rho b_{a_k}^j ; \sum \alpha_j(\rho) = 1, \alpha_j(\rho) = 0 \text{ 又 } 1 \right\} \end{aligned}$$

とかけられる。

$I = [0, \infty)$ とおくと, I は, 各 j に対して,

$$I = B_1^j + B_2^j + \dots + B_{N_j}^j$$

と直和分解される。お N_j の子に対する, 和分が存在する。これを $\{I_k^j\}_{k=1}^{N_j}$ とかこう。

$$K(A, a_j) = \sum_{k=1}^{N_j} \chi_{I_k^j}(A) c_{I_k^j}^j$$

とかかれる。

== には, $\{I_k^j\}$ は, 和分であるから,

$$B_n^j = \sum_{p=1}^M I_{k_p}^j$$

とかかれるが, $c_{I_{k_p}^j}^j = b_{k_p}^j$ とおいた。($p=1, 2, \dots, M$)

(8) を示すには,

$$\left(\begin{array}{ccc} \int_I \chi_{I_1}(A) \chi_{I_1}(a) da, & \dots & \int_I \chi_{I_1}(A) \chi_{I_M}(a) da \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \int_I \chi_{I_n}(A) \chi_{I_1}(a) da, & \dots & \int_I \chi_{I_n}(A) \chi_{I_M}(a) da \end{array} \right)$$

(9)

$$= \left(\begin{array}{ccc} \int_I \chi_{I_1}(A) \chi_{I_1}(a) da, & \dots & \int_I \chi_{I_1}(A) \chi_{I_M}(a) da \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \int_I \chi_{I_n}(A) \chi_{I_1}(a) da, & \dots & \int_I \chi_{I_n}(A) \chi_{I_M}(a) da \end{array} \right)$$

右の I の分割,

$$I = C_1 + C_2 + \dots + C_m$$

が存在すればいい。存在と存在は

$$A'(s) = \sum_{j=1}^N \chi_{C_j}(s) a_j$$

が問題をみたすから。

$$0 \leq \int_I d_1(p) \chi_{I_j}(p) dp \leq \int_I \chi_{I_j}(p) dp$$

$$\equiv C_j^1; \quad \int_I d_1(p) \chi_{I_j}(p) dp = \int_I \chi_{C_j^1}(p) \chi_{I_j}(p) dp.$$

$$C_1 = \sum_{j=1}^N C_j^1 \cap I_j \text{ とおく。同様にして,}$$

$$\int_I d_2(p) \chi_{I_j}(p) dp = \int_I \chi_{I_j^2}(p) \chi_{I_j}(p) dp$$

なる $C_j^2 \subset I - C_1$ が存在する。

$$0 \leq \int_I d_2(p) \chi_{I_j}(p) dp \leq \int_I (1 - d_1(p)) \chi_{I_j}(p) dp$$

$$\leq \int_I \chi_{I - C_1}(p) \chi_{I_j}(p) dp$$

であるから、その存在は保証される。

$$C_2 = \sum_{j=1}^N C_j^2 \cap I_j \text{ とおく。}$$

このおうにして、 C_1, C_2, \dots, C_m をとると、

$$I = C_1 + C_2 + \dots + C_m \text{ となる。 (1) が示された。}$$

証了。

§ 3. 定理の証明.

(i). $\Omega(t)$ が、有界凸集合であることは明かか。由
 集合であることを示そう。 $\Omega(t) \ni W_m$ 且 $W_m \rightarrow W$
 $(m \rightarrow \infty)$ なる X_0 の元の列 $\{W_m\}$ を任意にとろう。各 W_m
 $\in \Omega(t)$ たり、次の如き子(U) の元 $u_m(s)$ が存在す
 る。 $W_m(s) = \int_0^t K(t,s) u_m(s) ds$.

ところで、子(U) は、 $L^2([0,t]; X_0)$ の中の有界凸
 有閉集合であることを、明かかたり、子(U) は、
 $L^2([0,t]; X_0)$ の中の弱コンパクト集合である。何ん
 と云はんは、 X_0 は、分離的且反射的有バナッハ空間であ
 るから $L^2([0,t]; X_0)$ 自身、反射的と云うからである。
 故に、

$$\exists u(s) \in \text{子(U)}; \quad u_m(s) \xrightarrow{\text{弱}} u(s).$$

$\int_0^t K(t,s) u(s) ds$ は、 $L^2([0,t]; X_0)$ から X_0 の線型連
 続写像たり、 $\int_0^t K(t,s) u_m(s) ds$ は $\int_0^t K(t,s) u(s) ds$
 に弱収束する。 (かるに、 W_m は W に強収束してゐる
 のであるから、

$$W = \int_0^t K(t,s) u(s) ds.$$

これは、 $W \in \Omega(t)$ を示してゐる。 二れで (i) が
 示されたが、二の証明は、[4] にすた。

(ii) (i) と補題 4 による, \mathcal{Z} ,

$$\left\{ \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho; u \in \mathcal{U}(\cup_m) \right\}$$

$$= \overline{\left\{ \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho; u \in \mathcal{U}(\hat{\cup}_m) \right\}}$$

をえる。これによつて, 次の包含関係をえる。

$$\Omega(t) \supseteq \overline{\Omega(t)^{\circ}} \supseteq \overline{\bigcup_{m=1}^{\infty} \left\{ \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho; u \in \mathcal{U}(\cup_m) \right\}}$$

$$= \overline{\bigcup_{m=1}^{\infty} \left\{ \int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho; u \in \mathcal{U}(\cup_m) \right\}}$$

これと, 補題 3 による, $\Omega(t) = \overline{\Omega(t)^{\circ}}$ をえる。

証了。

§ 4. 近似列の構成。

前章によつて $\int_0^t K(t, \rho) u(\rho) d\rho$, $u \in \mathcal{U}(\cup)$, は,

$\int_0^t K(t, \rho) u_m(\rho) d\rho$, $u_m \in \mathcal{U}(\hat{\cup})$, によつて近似できる

ことがわかる。この章では, $\hat{\cup} = \{a, -a\}$ の特別の

場合には, 上の近似列を構成しよう。

$$u(s) \in \cup = \{ \lambda a + (1-\lambda)(-a); 0 \leq \lambda \leq 1 \}$$

$$d_1(s) = [1 + d(s)]/2, \quad d_2(s) = [1 - d(s)]/2$$

よつて, $u(s) = d_1(s)a + d_2(s)(-a)$ とおける。

$d_1(s), d_2(s) \geq 0$ かつ $d_1(s) + d_2(s) = 1$ である。

次に,

$$\int_{\delta^{-1/m}}^{\delta/m} d_1(\rho) d\rho = \int_{\delta^{-1/m}}^{\tau} d\rho \quad \text{ある } \tau \in \delta^{-1/m} \leq$$

$\leq \tau \leq \delta/m$ 2' 求'ある。

$$\beta_1^{(m)}(\rho) = \begin{cases} 1 & ; (\delta^{-1})/m \leq \rho < \tau \\ 0 & ; \tau \leq \rho < \delta/m \end{cases}$$

$\sum \beta_1^{(m)}(\rho) \varepsilon > 0 < \psi$, $\beta_2^{(m)}(\rho) = 1 - \beta_1(\rho)$ $\varepsilon < 0$

$u_m(\rho) = \beta_1^{(m)}(\rho)a + \beta_2^{(m)}(\rho)(-a)$ が'ある近似列
2'ある = ε は, 容易にわかる。

文 献

- [1] 7-3 = ヘルムホルツ; "数理物理学の方法";
- [2] Gårding; On the asymptotic distribution of the eigenvalues and eigenfunctions of elliptic differential operators, Math. Scand. 1 (1953).
- [3] Paley-Wiener; "Fourier transformations in the complex domain". Amer. Math. Soc. Coll., New York, (1934)
- [4] Falb, P.; Infinite dimensional control problem 1: on the closure of the set of attainable states for linear systems.